



# 人生、いつも 「今が出发点」

志茂田景樹 (作家)

心の床に引いたラインを越えてみよう

三年前にツイッターを始めました。百四十  
字以内の小窓に、はじめはイベントの告知な  
どしていました。そのうちに自分が漠然と考  
えていることを呟き始めたら、共感や感想の  
リプライ（返信）が殺到するようになりました。  
今では二十三万人を超えるフォロワー（呟  
きを追う人）がいます。

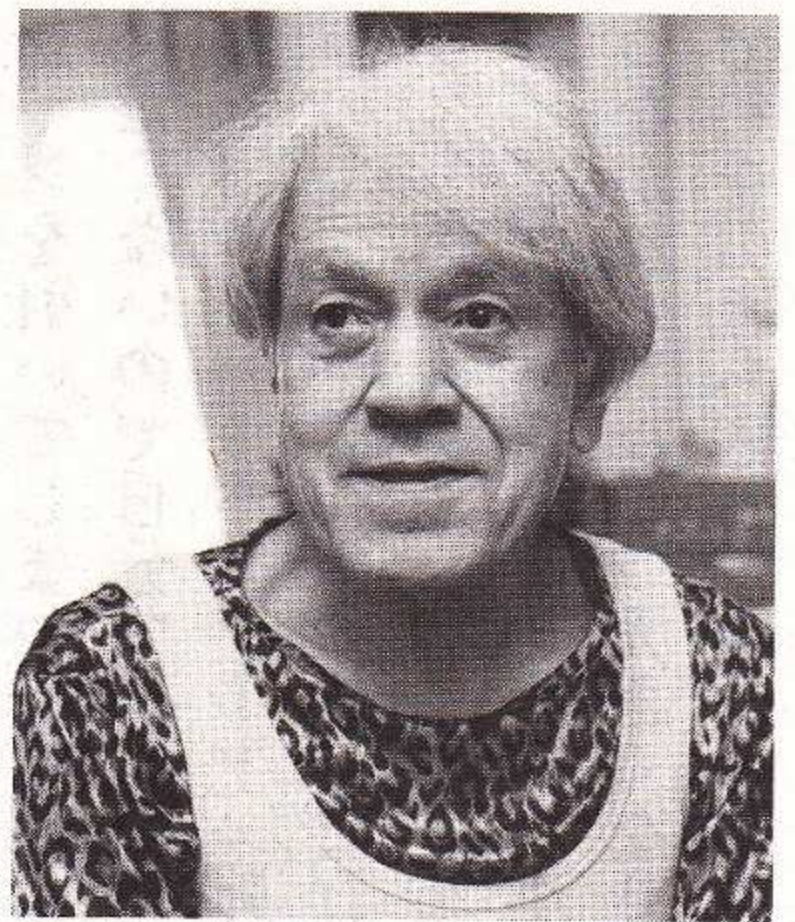
そこで感じるのは、今の若い人は心の床に  
ラインを引いてしまっているようです。傷つ  
きたくないので自分で線を引いて、そこから  
踏み出さない。バリケード（障害物）ではな  
いので、線は軽く越えられるのに決断できず、  
ラインの手前でどうしようか思い悩んでい  
る。ゾウの寓話と同じです。小さい時に鎖に  
つながれたゾウが、大きくなり力が付いたの  
で鎖を引きちぎって歩けるのに、そこにとど

まっている。切れるはずがないと勝手に思いこんで行動を起こさない。それと似ています。傷つきたくないので、心の床に線を引いて、その手前で逡巡しゆんじゆんしているのです。

だから、まず一步前に踏み出したらいい。ラインを越えてみれば、不安や怖れおそが取り越し苦労だとわかります。もし傷ついたとしても、その経験が自分を強くしてくれます。

## コンプレックスなんて無意味

五歳さいのときぼくは耳を悪くして、音感が養えずにオンチになりました。そうでない人にはとても想像できない劣等感れつとうかんにずっと苦しみました。小・中学時代は音楽の時間がつらかった。蚊かの鳴くような声しか出せない。恥はずかしくて情けなく、落ちこみ、コンプレックスがどんどん膨らふくりました。高校になって音楽が必修でなくなり、やっとほっとしたのに、



1940年、静岡県生まれ。中央大学法学部を卒業後、さまざまな職を経て作家を志す。'80年に『黄色い牙』で直木賞を受賞。近著に『人って、みな最初は石ころだもの』(ポプラ社)等がある。「よい子に読み聞かせ隊」隊長として全国で講演活動を行っている。

社会人になったら「天敵」のカラオケが流行りだした。当時は仕事の接待といえはカラオケです。会社の上司から、歌わないのは取引先に失礼だぞと何度も叱しかられる。まだ個室なんてない。しかたなく小さな声で歌うと、店内の関係ないグループの客まで口をあめぐり開けて見ている。もう針のムシロでした。

その日の夜、考えました。音譜おんぶ通りに歌わなければいけないと思ひこんでいるけれど、歌は自分が歌いたいように心をこめて精一杯せいいつぱい大きな声で歌えばいいのではないかと。そ

れで開き直って、次の機会に当時流行っていた「勝手にしやがれ」を歌った。劣等感ゆえに心の床に引いていたラインから一步踏み出したのです。そうしたら「お前にしか歌えない」と大いに受けて、お義理ではない拍手が知らない人からも湧き起こったのです。以来、マイクをもつことが大好きになりました。

恥ずかしい体験をすると、人はコンプレックスを膨らませてしまう。他人はすぐに忘れてしまうのに、自分の中ではずっと引きずっている。でも、それをさらけだしてしまえばコンプレックスなんて無意味だとわかります。すると劣等感が強みに変わる。傷つきたくなくて引いたラインを越えて挑戦すれば、楽になり、新しい世界が開けます。

「今からでは遅い」と、挑戦をためらう人がいます。社会人になって十年、二十年とやってくれば、誰でも仕事や人生についていろいろ悩みます。充たされずに悶々とする日々

が続く。ただ、イチからやり直す踏ん切りがつかない。それまでやってきたことが全部否定されてしまうと感じるからです。でも、やり直すということは、今までの歳月をすべて否定することではありません。たとえば五十歳になってやり直すのは、二十歳に戻ることではない。それまでの二十年、三十年が必ず力になって、五十から再出発するのです。むしろ報われなったり挫折が多いほど、新しい挑戦の基礎がしっかり築かれているものです。いくつになっても遅すぎることはありません。今からでも遅くはない。

### 逆境のときは力を蓄える

ただし、やみくもに前に進めばよいということではありません。踏みとどまる勇気、決断も必要です。ぼくは社会に出てからずいぶん転職しました。人間関係に疲れるとすぐに

辞めていました。職場の人は何とも思っていないのに、他人との間に自分で壁をつくり、職場が嫌になつて転職したことが何度もあります。これでは、どこへ行つても同じです。職場を変わるたびに、ああ、おれはダメな人間だなと自分を卑下することになる。だから、昔のぼくのような転職はしないほうがいい。今いる職場で得るものを得てやりきつたと思えるまでは、耐えたほうがいい。

これは転職に限りません。今は耐え忍ぶとき、と自制する判断も大事です。逆境のときは、あがかずに自制して力を蓄えて、スタンバイ状態にしておく。そうすれば、好機のときにすかさず前に踏み出せるものです。自制心こそ、新しく挑戦する機会をたぐり寄せます。踏みとどまる決断、勇気も必要。焦るところはありません。

二〇〇〇年三月、還暦になった日の朝、ぼくは新ゼロ歳に生まれ変わりました。前年「よ

い子に読み聞かせ隊」を結成したあと、そう決めていたのです。ですから、もうすぐ新十三歳になります。新ゼロ歳になったからこそ、二、三歳の子から教えられることもあるし、今も大きな夢を描ける。気はもちょうです。

生き方を年齢というものさしだけで決めるのはよくありません。周囲をみて、ああ、自分はまだ五十か、六十かと考えて意識を縮こまらせたなら、自分がどんどんしぼんでしまう。年齢なんて関係ない。周りがどうかではなく、自分はどうかの考え方がいい。

「今が出发点」——これがずっとぼくの座右の銘です。いつも今が新しい出发点。今からでは遅すぎる、と思いこんだら何も始まらない。遅いと気づいたときを出发点にすれば、新しい方策が必ずみつかります。失敗しても、「今が出发点」と呟けば、落胆せず新しい挑戦に踏み出せます。